

翻訳

ロシアのポストモダン哲学について

尾崎誠<sup>1)</sup>、ヴァシリイ・グリツエンコ<sup>2)</sup>、

タチアーナ・ダニルチェンコ<sup>3)</sup>、中富清和<sup>4)</sup>

キーワード: ポストモダン、超テキスト、学際性、統合化

第1章 現代世界の危機とポストモダン

2011年の春と秋に、世界の東西にわたって衝撃を走らせた大きな事件が二つ起った。一つは日本における津波と原発事故であり、もう一つはヨーロッパにおけるギリシャの財政危機である。これらの出来事はいったい何を意味するであろうか。今や世界は終末を迎えているのであろうか。

かつてヤスパースは2500年前にソクラテス、孔子、釈迦、イエス等人類の教師達が出現した時代を人類史における第一次枢軸時代と呼び、現代はもはや彼等の教説もその効力を失い、終末へと至り、新しい歴史の原理を希求する第二次枢軸時代に入ったと明言した。同時代のハイデッガーも、現代は古代ギリシャに始まった西洋の歴史も終焉に達し、今や新しい歴史を開始すべき「別の元初」を求める時代であることを予告した。特にハイデッガーはソクラテス以前の古代ギリシャを「最初の元初」とし、その根底に深く隠された根源に復帰すべきことを訴えた。古代ギリシャはヨーロッパ文化史の源泉であり、回帰すべき故郷である。今やギリシャが国家破産の危機に直面しているヨーロッパでは、なぜさらにその負の遺産を背負ったギリシャをあくまでも執拗に救済しようとするのか。その理由は、ハイデッガーが古代ギリシャに帰れと叫んだことと無関係ではあるまい。およそヨーロッパ人にとって古典とは古代ギリシャとローマの古典を意味する。それほど古代ギリシャはヨーロッパ文化にとっては心の故郷なのであろう。

現代世界の危機とは古代ギリシャに始まった西洋文化の崩壊を意味し、それに取って代るべき新たな思考原理、認識パラダイムを模索すべきエポックを迎えたということであろう。ここにポストモダンの新しい歴史の原理が探求されねばならない不可避的必然性があるといえよう。

かつて2000年前、イエスは「神の国」の近き到来を信じたが、結局それは到来せず、未来へ延期された。その未来とは、聖書の物語によれば、世界史の終末に復活したキリストとしてのイエスが再び到来する時であると予言されている。しかし、イエスの死後、パウロはその遠い未来を待たずに、イエスの人格と行為において既に「神の国」が先取りされて実現されたと見なした。即ち、イエスをキリスト・救世主として同一化したのである。これが人間イエスを神格化したキリスト教なので

1) 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科教授

2) ロシア国立クラスノダール大学文理学部哲学科主任教授

3) 同講師

4) 千葉県立東金商業高校教諭

ある。つまり、イエス自身の「神の国」信仰としての原始キリスト教とパウロがイエスをキリストと認知したキリスト教との間には質的転換が生起したのである。それはイエスからパウロへの拡大化路線であり、その前身たるユダヤ教からの脱皮でもあった。しかし、世界史は未だに「神の国」の実現に至らず、むしろますます混迷し、いよいよ終末の様相をさえ帯びてきている。世界史の終末と共に、キリストの再来によって「神の国」が達成されるという期待は、未来への希望として未完成のまま残されている。つまり、キリストは現代ドイツの先鋭的神学者ユルゲン・モルトマンがいうように、「途上の存在」なのである。ヨーロッパの精神的伝統としてのキリスト教は今やその終末論的事態に巻き込まれているのであろうか。

今年世界に起った大きな出来事は、もはや既存の思惟方法が破綻し、通用しなくなったことの実事上の証しであろう。今やハイデッガーやヤスパースが夙に予想したように、歴史の転換期を迎えて、新たな思惟のパラダイムを求める時期にさしかかっているといえよう。しかもハイデッガーはますます発展する科学技術文明の反面たる危険性も同時に警告していたが、それもその最先端の事故という形で現実となった。ドイツが対岸の火事としてではなく、自らの問題としていち早く政治決断を下したのも、いかにも哲学の国らしい。

そのドイツではヘーゲルも「終りにおいて初めて始めに到達する」(『精神現象学』)と終末即始元の円環史観を呈示したが、東洋では特に『易経』以来、中国古典に共通する「終始」という時間観念が存在論的原理として確立され、終りに達して再び始めに還るという無限の循環論が支配的である。19世紀清の時代、康有為は儒学の伝統的「下降史観」に対して、「上昇史観」を提唱したのも、単に西洋の進化論や進歩史観の直接的影響だけではなく、そのような歴史的背景による影響作用の表れでもあろう。ヘーゲルの進歩史観を唯物論に逆転したマルクス主義も、ベルリンの壁やソ連邦共産主義政治体制の崩壊によって、既に無効となった。そして最近では、そのような今日のロシアにおけるポストモダンな動きを垣間見ることもできるようになった。

ここにポストモダンにおける思惟の新たな傾向を示すものとして、現代ロシアにおける動向を紹介する。本稿の第2章は、ロシア国立クラスノダール大学のヴァシリイ・グリツエンコ教授のロシア語原文「現代人文学のポストモダンな参照点」を同大学のタチアーナ・ダニルチェンコ博士が英訳し、中富が準備的に邦訳し、尾崎が監訳したものである。

## 第2章 現代人文学のポストモダンな参照点

現代の学問的探求は集中的な理論的かつ方法論的融合によって特徴付けられる。それは古典的学問と非古典以後のそれとの本質的相違である。我々は何よりも人文学を意味する集中的情報の学問の基本的な方法論的立場について考察しよう。

### 二つの基本的パラダイム—モダン対ポストモダン

20世紀の最後の四分の一と21世紀の初めにかけての学問の外観と方法論において二つの基本的に共存するパラダイムがある。一つは、17—19世紀にかけての学問的合理主義の否定と創造的連続である。それは新しい時代に起ったので、近代的様式における学問と方法論としばしば呼ばれる(ハーバマス)。それは一元論、理論と数学的計算と実験との相互作用、及び人工的

言語の使用によって特徴付けられる。この方法論は構造的に機能的なシステムと進化論的アプローチにおいてその最も際立った展開を見出すことができる。

このパラダイムは、自然と社会的な生活には固定した構造が存在するという確信、客観的絶対的知識、つまり混沌に対して秩序が全体として存在するという確信に基づいている。

もう一つのパラダイムは、ポストモダニズムと呼ばれ、ポスト構造主義、脱構築、超モダニズムも同意義である。運動、加速化、不確実性、移行性へ排他的に注意が払われるのが、この認識の主な特徴である。ポストモダニズムの最も方法論的に明確なものは、脱構築、ポスト構造主義、リズムに体现されている。当初、それはドゥルーズ、リオタール、ボードリヤール、デリダ等の作品に基づいて発展してきた哲学的文化的方向に明らかに示されていた。この場合、ポストモダニズムはポスト構造主義として特徴付けられる。

モダンとポストモダン様式との方法論的ないかなる総合も未だ起ってはいないが、ある成果として、モダンな学問的知識において発展してきた、これらの新しい方法論的原理とアプローチを学際的、総合的、仮定性、進化論的認識論等と呼ぶことは可能である。

### 情報と「人格—機械」思考

多くの点において、ポストモダニズムは情報・コンピューター・テクノロジーと「人格—コンピューター」思考の集中的発展の下での方法論的反省の成果である。

今や現実そのものとなった「人格—コンピューター」思考は認識論的状况の新しいタイプのみならず、また新しいタイプの個人をも生み出したのである。ペンをもって考えること、タイプライターを打つこと、それらとコンピューターとは違ったタイプの思考であり、それぞれメリットとデメリットがある。これは別の反省すべき課題である。

テクノロジーとポストモダンの諸言説とは人の思考方法をも変えてしまった。いったいマス・コミュニケーションの電子的手段、即ち超テキスト・テクノロジーの興起と共に、「ゲーテンベルク銀河」と呼ばれる線形テキストの支配する文化の終末が訪れた。グローバル・ネットワークを生み出した直近の十年間は、この過程において特別の考察を要する本質的な改善をもたらした。一次元的テキストから電子的多様な超テキストへの変化が到来したグローバル・ネットワークの仮想的環境においてはテキスト空間の本質的に新しい組織化の形態が生じるのかどうかということが、問題である。

コンピューターの形態における超テキストは、参照によって提供されるすべての点で、一瞬にして一つの情報量を別のそれへと移行させてしまう。テキストはもはやある方向や構造や境界をもったものとして線形的に作られるものとは考えられず、もはやゲーテンベルクの機械とモダンな様式には対応しなくなり、ポストモダンな態度を体现することとなる。

### モダン記号論の変化と認識論的形態としての超テキスト

テキストとその多様な形態とは本質的に認識論的価値をもつ。線形的言説の体现としての印刷されたテキストは、その古典的理解においては科学的理論のイメージが起きる基礎である。一貫性、独立性、完全性といった論理的諸要求は線形的言説の組織化の原理から導出される。複合的対象の全面的体系としての理論についての認識論的表象は、印刷された語の記号形態に直

接的に依存する。

テキストの現代版は間テキストである。間テキストの基本的構成要素は借用、引用、他のテキストの模倣や回想である。引用により、テキストは反省的形成において修正される。即ち、テキストの中のテキストとなる。

超テキストはテキスト空間の組織化の複合的、非線形的形態として理解される。超テキストにおいては、テキスト素材の組織化は、その句、段落、節が線形的連続的に配置されるのではなく、それらの間で移行可能な形態において配置されるというような仕方で構築されるのである。これらのコミュニケーションを用いて、線形テキストの一群を形成しながら、いかなる秩序においてもテキスト素材を読むことができる。多量のコミュニケーションをもった拡張的素材の場合、複合的超テキスト空間の形態において記号論的ネットワークが形成される。テキスト単位のそのような高度な形成と閲覧とはコンピューターによってのみ可能である。

超テキストと超テキスト・テクノロジーのイメージに従って、基本的な認識論的結論を定式化しよう。

現代のコンピューターの隠喩によれば、超テキストは知識、認識活動、科学的理論の組織化の形態となる。それは、個人的欲求の合理化の形態として、言説をレベル分けする代わりに、多量化したいという社会と文化の状況と相関的である。現代の小説や映画、テレビは大衆消費に基づいてそれを上手く維持している。多様な個人が一次元的ではないように、知識の超テキスト的組織化は通常よりもはるかに複雑である。超テキストはそれ自体で、線形的言説における知識の組織化と非線形的リズムとの結合を可能にする。学位論文がコンピューターの超テキストの類においてその防御と指導を仰ぐことになる日も近いであろう。

超テキストは、その複合性と多次元性により、宇宙の別々の主題についてのイメージではなく、完成された世界像を生む。

多次元と多次元性により、超テキストは学際的アプローチのような現代の方法論的傾向とよりよく両立する。

超メディアの形態における超テキストは、脳の右半球と左半球との思考を等しく維持し、古典的認識論の観点からは両立しないものを結合することができるのである。

最終的に仮想現実の補完によって、超テキストは可能世界の意味論を論理的思考の規範へと変容する。

そうしている間に新しいヨーロッパ社会によるテキストの活版印刷的複製形態の使用は記号論的变化へと導いた。即ち、心的物的暗号化の方法と知識の組織化、思考の反省的基礎、理解の方法と形態が変化したのである。デカルトの分析的方法と古典的学問はテキストの印刷形態の本質的産物である。

超テキストはまたコンピューター・テクノロジーの使用の結果として生じた記号論的变化でもある。超テキストの下に育った新世代の科学者にとっては、線形的言説に基づいたモダンな科学理論と科学的思考は極めて原始的で古代的にさえ見えるであろう。

### 構造主義あるいはポスト構造主義—哲学的基礎の変化

19世紀の人文主義的文化においては生活と意識との対立が根本的な対立であった。産業化時代における物質的と理想的生活との対立は物質性、物質的生活を優先することで解決された。



20 世紀の西洋の人文主義的文化においては「生活と意識」とのディレンマは克服され、言語は最も根源的な実在として認識され、主なイデオロギー的対立は「テキストと実在」の対立として認識された。20 世紀の文化においては主観と客観との、技術論的客観主義と仮想的仮構的新神話論との統一が現実性として考えられ始めたのである。

最終的には、イデオロギーの分析、権威の言語とその文化への影響は一般に社会と心情の構造化において政治的言説の根本的役割を示す。ポストモダンのポスト産業化的文明と文化の段階における文明の進歩は、社会の全体主義的構造としての権威の脱構築の必然性と衝突したのである。現代の認識論的分析は方法論としての構造主義はまた全体主義的論理の結果でもあるという結論に導き、従ってそれはポスト構造主義的分析の方法論の様式における不安定な、構造化されていない諸要素の分析によっても追加されるべきである。

20 世紀末には次のような結論に達した。即ち、人類の根源的心的空間として、ある一様な普遍的な世界観の代りに、一群の個別的な、相互に異なる世界観があるということに。20 世紀には我々はニーチェの「神は死せり」のテーゼを繰り返す。それは、情報の下部構造の発展と共に社会における普遍的イデオロギーの死を意味する。しかし、同時に新しい情報の奴隷化が記号論的操作の形で現れたのである。

### 解釈学一言説と翻訳の問題

言語と言語的問題への恒常的注意は現代人文学のみならず、学問的知識全体の特徴的問題でもある。それは知識における言語の根本的役割の認識、民族的科学的世界観の形成、存在論的前提条件の仮定、及び他の理由によって惹き起こされた。

解釈学は現代的学問においてさまざまな形態において根本的地位を獲得してきた。即ち、テキスト解釈の理論と実践として、また新しい存在論を追求する哲学の方向としても。一方では、それはあらゆる学問的問題への入り口であり、他方では、言語問題解決の手段と方法でもある。そしてすべての論理的に与えられた合理的知識は象徴的に明確化された知識であり、従って論理的問題は解釈学として作用する—人文主義的学問あるいは自然科学が存在するかどうか、という問題等。それ故に、テキスト批判と解釈学の中核的概念—言語、テキスト、理解—は、学問的隠喩と概念となったのである。現代人文主義的観念の中心的場所は、ある非言語的出来事—欲望、象徴的行為、論理的操作—を、それらの明確化の独自の場所としての言語へ還元することである。ハイデッガーは、「言語は存在の家である」といった。

多様な言説の仮定に示された多元論と知識の学問的また非学問的形態の同等性の認識と共に、社会学的理論、文芸批評、哲学、及び現代人文学の他の諸分野の特殊な「混成領域」の形成もあったのである。

### 普遍性、学際性、記号論の危機

ロシア国内の人文学における学際性の発展は 1980 年代における着実な傾向となった。一方では、それは弁証法的唯物論の方法論的危機によって惹き起こされた。弁証法的唯物論と弁証法論理は普遍性をもつ理論、論理、方法論として考えられた。それは促進されたが、同時にまた極端に単純化された方法論でもあった。結局、すべての問題を弁証法論理、方法論、知識理論

へと還元するようなやり方と結びついた方法論の貧困化は、弁証法的唯物論の危機へと導いた。

弁証法的唯物論と弁証法論理の危機は、普遍的方法や生命と知識の法則の認識は時代錯誤であるということになった。他方では、新しい独創的な方法論の導入が起った。ロシアでは共産主義イデオロギーの崩壊以後、以前のいくつかの人文主義的学問分野は消えたか、理論的変容を成し遂げた。科学的社会主義とソ連邦共産党の歴史の変化は他の学問分野—政治科学や社会学—を送り届けることになった。「文化科学」のような学問分野の興起は、歴史、文化、人間的主体性といった人文主義的領域に学際性を導入したのであった。しかし、学際的傾向は人文諸科学だけの特徴ではない。サイバネティクス、仮想論、記号論のような学際的戦略もあった。学際性は、文化哲学等と呼ばれる哲学的反省を通じて、20世紀のロシア国内の哲学的理論へと浸透し始めたのである。

学際性は現代言語、新しい言説、さまざまな言説の相互関係を要求し、かつそれを中心的と見なす。記号論はこの問題において非常に重要である。人文主義的知識の記号論は学際性の発展の現象・兆候と理解されるに至った。

文化記号論において文化は記号及びテキスト空間として理解される。文化の分析において、文化記号論は文化的形態の形態学と論理に特別の価値を付与する。文化的形態はこのようにして意義深い形成の記号論として、またいろいろな側面に応じて、文化的暗号、メッセージ、テキスト、あるいはモデルとしての役割を演じているものと考えられる。文化的形態の論理とレトリック修辞法として、文化記号論は文化的言説のあらゆる種類の主題をもつ。

文化記号論は文化哲学、言語学、記号論、構造的技術の影響下で発展してきた。それは、文化の法則を開示するために、哲学的、記号論的、構造的、心理分析的分析手法と方法を用いるのである。

### 言説の分析と言説の多様性

ポストモダン社会ではテクノロジーとその外観は未曾有の発展を遂げた。例えば、時代の様式とイメージとしてのテレビ放送は同時にポストモダン時代の反省と体現でもある。テレビ技術とポストモダンな態度との遺伝的關係性は、二つの考察された現象に同時に固有なものとして、断片性、間テキスト、模擬演習、多元論のような特徴をもつ。挙げられた諸特徴はポストモダンの心情的特徴を反映している。この列举によれば、広告宣伝は商品世界のみならず、全体としてその社会と思考法の特徴としても考察される必要がある。広告宣伝における多様性は自由社会、自由な思考、方法論の多元性を統合する属性であり、逆に、独占は全体主義的傾向、一元論、原始性の支配を証するものである。

ポストモダンの言説の多様性は文化と意識において認められる。言説の概念は、ミシェル・フーコーの意味では、発話と行為との社会的に惹起されたシステムであり、また具体的な社会文化空間に容認され、かつ支配的な命令的態度に依存するところの言明の実体化の方法と規則でもある。権威、知識、情報、コミュニケーションは、ポストモダニズムの言説であるところの模擬演習の一樣な場に出現した。個人は可能な限り、権威と情報の混合の見せ掛けを生じさせている困惑から救われるべきである。ポストモダン世界における全体的模擬演習・実験の影響下から抜け出すための最も効果的な方法は、有効性を知覚する他の特にポストモダンな方法—皮肉—に見出されうる。最後のものは、ポストモダン社会によって説得的に与えられた「異質的一様性」からは区

別された、自己自身の存在の様式を探求することを目指した、特に個人的な実践として理解されるものである。このようにして、時代のメディア的権威を冷笑する目論見の中立化の機会はこのようなポストモダンな方法とテクノロジーを用いて、現代人に固有の目的を実現するというポストモダンの有効性への皮肉な態度に見られるのである。

こうして、現代の学問的探求の実践は、情緒、皮肉、模造がその方法論的環境を獲得するように、より複雑化しているのである。

### 学際性と統合化

20世紀末から21世紀初めにかけての学問の特徴としての多学際的連合への傾向において、統合化が働く概念的モデルとカテゴリーが実際に人文学者によってより多く使用されてきた。統合化は、通常自己組織化と呼ばれる「混沌からの秩序」という型の移行の法則を研究する。自己組織化とは、進化的実存的構造の複合的開放的非線形的システムにおける形成過程として理解される。「非線形的システム」という術語は、システムの特徴がそのプロセスの強度によって影響されることを意味する。開放性は、システムが環境と互いにエネルギー、実体、情報を交換することを仮定する。システムの複合性は、その多様な可能な反動の程度とシステム行動の不可測性の大きさによって見積られる。ポストモダンな学問の先導として統合化は、すべての「異常」に対して寛容さを示しながら、最も古代的な伝統に関しては、方法論的に私的評論と哲学を含むものである。

統合化は、社会システムの進化の仕方、進化論的危機、脅威、事故、予測の信頼性の諸理由、また哲学、文化科学、社会学、エコロジー、経済学、地政学における予測可能性の基本的限界についての理解に関する新しい方法論を提供することができる。

### 仮想性、諸可能世界の意味論、真理の多元論

仮想性は学問ではないが、いかなる学問分野でも使用しうるし、また学際性を志向する戦略と呼ばれる学問的アプローチではある。仮想性の観念は、異なる対象間の相互関係を特定化し、それらを階層的レベルに置き、それらの間の特定の態度を規定する—例えば、発生とか相互関係とかの規定。仮想レベルの諸対象は根底的レベルの対象によって発生させられるが、しかし、発生させられたという地位にも拘わらず、発生させる実在の対象と存在論的には同等のものとして協調し合うのである。発生させる実在に関して一連の仮想的対象は仮想的現実を形成する。

仮想性とは、同じ学問の限界内で、相互に還元できない、異なったタイプの現実性の存在を認識することである。我々の意見によれば、仮想性の観念は、世界という装置がより一層深く把握されるような、ヨーロッパ文化にとっては本質的に新しい思考のパラダイムを提供する。

### エコ・人間中心主義と共進化の原理

人間にとって根本的に必須な環境は少なくとも四つの測られるべき側面がある。即ち、自然的側面（植物、動物、水、大気）、人工的側面（技術文明の成果）、情動的側面（記号、情報伝達システム）、社会人間的側面（心情と生活様式をもった他の人々）である。多様な社会実践的生活を

営む人間は、一群の天体的、歴史的、文化的、心理的、生物学的リズムの中で生存しているのである。人間生活の多次元性は、学際性ばかりではなく、また人間生活のさまざまな領域—自然、技術、社会、民族、文明等—の相互作用についても説明を求める。何よりも先ず、自然と社会といった二つの超複合的システム間の相互作用が問題である。

それ故に、好むと好まざるとを問わず、ポストモダンな学問はエコロジーと人間中心主義の原理を含む。それはさまざまな形で生じる—生命倫理の要請、学際的学問としてのエコロジーの発展、宇宙論における人間的原理、自然と社会システムとの共進化の原理といった形で。N. モイセーエフは真っ先に自然と社会システムとの共進化の原理について語り始めた。

知識の発展の現代的状況は世界の複合システムの共進化の原理を構築することを容認する。統合化は知識の学際的総合の基礎として、自然科学者と人文学者との対話、コミュニケーションの国際的学際性、科学と芸術との対話と総合、科学と宗教との対話、西洋と東洋との対話への基礎として用いられうる。統合化は、共進化の原理、複合的社会システム、さまざまな発展段階にある国々や地域間の共進化の原理を構築する上で我々に知識を与える。

\*\*\*

上に挙げた諸アプローチは現代的学問のあらゆる理論的方法論的参照点を取り上げたものではなく、学問的態度における最も流行しているものを扱ったにすぎない。独創性とさまざまな学際間の連合はそれらに体现されている。さらに現代的な方法論の本質的特徴をすべて挙げたとも保証できない。特に、我々は主に理論的原理に止まり、現代の学問における経験と理論との、根本と応用との相互作用の挑戦については取り上げていない。余りにも多くを包括するのは不可能である。

\*\*\*\*\*

#### Abstract

#### On Post Modern Philosophy in Russia

Trans. by Kiyokazu Nakatomi

In 2011 two sensational events, that had a great impact on the world, occurred. One was the Great Tohoku tsunami and the accident at the Fukushima nuclear plants. The other was the financial crisis in Greece and Europe. However, what do these mean? Is the world facing the end? Once, Jaspers preached that the first Axial Age of the great wise men appeared. Now it is the age where their teachings lost their meaning and man desires a new principle of history. Jaspers called it the second Axial Age. Heidegger predicted that the western philosophy from Greece reached to the end; man should desire a new history of 'other original beginning'.

In Russia Prof. Vasiliy Gritsenko also is researching for new paradigms and principles



after the collapse of Communism. He provides a new postmodern philosophy that consists of the post-structuralism of France, semiotics, media-theory and hypertext epistemology. The characteristic of his philosophy is non-linear, non-mechanistic and the quality of logic-jump. He calls it synergetics. Addition sometimes brings synergy, sudden increases and unexpected changes. That is adequate with current human thoughts. We have infinite and various possibilities of thought and information. Such philosophy realizes the synthesis of all sciences and anthropology.